

令和2年度 富山県環境審議会 野生生物専門部会 議事録

- 1 日 時 令和2年5月20日(水) 10:00~12:00
2 場 所 富山県民会館611号室
3 議 事 (審議事項、報告事項)

〈審議事項〉第3期イノシシ管理計画について

(部会長)

雌個体を優先して捕獲するという文言が出てくるが、何か技術的な方法はあるのか。雌は警戒性がより強いので、雌は入らず、幼獣ばかり罠にかかることが多い。

(事務局)

ねいの里で実施しているものでは、囲いわなにセンサーのカメラをつけて、個体が入った後に遠隔操作で捕獲を行っている。雌雄の判断は難しいが、親子連れの成獣が入った段階で柵を落とすことが可能である。また、捕獲専門チームでは、少し簡略版のもので、囲いわなに親子連れの親が入った段階で作動することを念頭にシステムを動かしており、順次拡大、普及していくことによって成獣個体、特に雌個体を捕獲していきたいと考えている。

(委員)

富山県捕獲専門チームの1チーム当たりの人数は何人か。また、何頭ぐらいの捕獲を目指しているのか。

(事務局)

捕獲専門チームは、チームによって人数は異なるが、1チームあたりおおむね10名から14名程度の編成のところが多い。設置箇所は、昨年度までに黒部、大山、南砺、高岡の4地区で設置しており、本年6月には新たに八尾、砺波で活動する予定である。捕獲頭数は400頭から500頭程度を目指したいと考えている。

(委員)

指定管理事業の予算はいくらか。

(事務局)

環境省の指定管理鳥獣捕獲等事業の予算を活用しており、本年度の計画額については、約6,000万円となっている。これは捕獲だけではなくて、OJTの研修など第2期の養成研修等も含んでいる。なお、今年から砺波、八尾の2チームを増やすこともあり、ここ数年、予算は増額している。

(委員)

有害と指定管理と狩猟を合わせて9,000頭捕るということになるが、指定管理の目標は

どこかに出てくるのか。

(事務局)

管理計画には、トータルとしての目標捕獲数だけを記載している。県が直接実行する捕獲は指定管理になるが、市町村が主体となって実施している有害捕獲も国の鳥獣被害防止総合対策交付金や、昨年度からCSF対策ということで、県単独の報奨金の上乗せにより、捕獲の強化に対する誘導を行っている。そういう意味で、全体として県がかなりの部分で関与し、政策的に誘導していると考えているので、内訳までは示していない。

(委員)

資料には他県の捕獲数もあるが、富山県の場合は増えてきている反面、福井と岐阜はかなり減っており、被害額も減っている。これは頭数が福井、岐阜は減ってきていると言わなければならないのか、電気柵が行き届いたのか、減った特別大きな理由があるのか、教えていただきたい。

(事務局)

複数の要因が絡んでいると思われる。まず、岐阜県は担当者に確認したところ、捕獲を強化した結果、生息頭数自体が減っているのだから、捕獲頭数も減ってきており、農作物被害についても減少傾向に向かっているのではないかとのことだった。なお、岐阜県は、生息頭数調査を昨年度から初めて実施し、頭数が1万6,000頭でその前は調べていないため、明確な数字の減少幅は正直分からないということである。次に福井県の場合、イノシシよりもニホンジカの被害が多くなっており、両方を併せて考えると、まだ減っているような状況にはないと聞いている。各県とも、電気柵の設置等も集落を囲むような形で着実にやってきたことと併せて、高い捕獲圧を継続的にかけてきた成果というふうに認識していると聞いている。このため、本県としても、継続的に高い捕獲圧をいかにかけていけるか、というところが課題である。

(委員)

しっかりと捕獲を継続してやっていただきたいが、岐阜県はCSFの影響による、頭数全体における影響というのは出ているのか。

(事務局)

岐阜県のCSFによる減少幅が正直よく分っていない。今後もう数年たったときに改めて確認していかなければならないと考えている。

(委員)

今回はイノシシだが、シカも大変心配しているので、力を入れていただきたい。

(委員)

管理の目標についてであるが、CSFの感染防止の観点からの生息密度を算定されていて、知見が少ない中で結構苦労されているとは思いますが、算定の因子として、県内の森林面積の28.5万ヘクタールから算出しているが、その森林の中には山岳地域など、もともと

密度が低いと思われるところも、密度が濃いところもある。そういうところまで加味して計算できるのかどうかということが一つ。また、イノシシの個体数については、捕獲と併せて自然淘汰というのも影響としては大きいと思うが、昨年などは雪が少なく、越冬して生き延びるイノシシが増える傾向があったのかなと思うし、一方では、CSFに感染しているイノシシが、体力が落ちて越冬できないというような傾向もあるのではないかとも思うが、捕獲数やイノシシの被害について、例年と比べて何か傾向が見られるのか、分かれば教えていただきたい。

(事務局)

森林面積の 28.5 万ヘクタールについては、県の森林面積を基に算出しているのですが、イノシシの生息域ということを見ると、若干割り引かないといけないところもあるとは思いますが、現状、そこに対する知見もまだない部分があるので、まずはこの面積を基に算出しているところである。今後知見が深まっていく中で、検討していく必要があると考えている。また、CSF 及び今回の暖冬等の影響については、今回示している推定生息数は 30 年度末時点でのデータで算出しているのですが、今冬の暖冬の影響などについては反映されていない。暖冬やCSFの影響がどれぐらいあるのか、現時点では把握できていないのが実情である。

〈報告事項〉 ツキノワグマ対策について

(委員)

春の捕獲をやっておられると思うが、有害ではなく個体数調整で許可がどうなっているのかということと、狩猟や個体数調整でどれぐらい捕られているのか教えていただきたい。

(事務局)

昨年度の 171 頭は全部被害防止の有害捕獲である。狩猟の捕獲については、まだ数字が上がってきていない。ちなみに、その前の年が狩猟では 5 頭で、近年、狩猟による捕獲は 1 桁台の状況となっている。春の捕獲については、山間部も含めて有害捕獲として実施しており、あくまでも出沒等があった地域において、限定的に行っている。

(委員)

春の場合は、いわゆる予察駆除なのか。また、何頭という数字は出るのか。

(事務局)

里山等に出沒したもので被害をもたらすおそれがあるものを行っている。今年の場合、4 月、5 月に 9 頭、1 月から含めて 11 頭、昨年度の場合は 5 月まで 6 頭となっている。

(委員)

個体数調整のような調整捕獲を進めていく考えはないのか。

(事務局)

主たる目的としては被害防除としているところである。

(委員)

春の捕獲を計画的に進めるほうが猟期を単純に増やすよりも効果的だと思うがどうか。

(事務局)

あまり春の捕獲を強化してしまうと、秋に凶作だった場合に生息頭数の大幅な減少につながるおそれがあるので、どのように進めていくかというのは十分検討していく必要があると思っている。

(委員)

県内の推定個体数で、優良植生域と普通植生域で、令和元年が反転しているが、優良植生域が少なく普通植生域のほうが増えているというのは、それぞれの豊凶の問題でなったのか教えていただきたい。

(事務局)

優良植生域については、県東部の奥、有峰を中心としたブナ帯を基本的に優良植生域としてカウントしているが、数字は誤差の範囲内というか、状況は変わっていないと理解している。普通植生域については、今回増えたのは南砺市のほうであるが、今回カメラに写った個体が非常に多かったので頭数が増えた形で出ている。この増えた要因は、コンサルともいろいろ話しているが、分からない部分もあり、今後しっかり考えていかないとけないと思っている。一昨年とその前の年は、比較的ブナとかミズナラも含めて実なりが良い年だったので、生息個体数としてはある程度安定的に増えたこと、優良地域だけに生息するというのも限界があるので、普通植生域も含めて全体的に均一に個体がいるのではないかと考えている。

(委員)

自動カメラのデータを使っているのか。

(事務局)

カメラに写った個体はツキノワグマの斑紋で個体判別をして推定頭数を出している。

(部会長)

ツキノワグマは2,400メートル以上の高山帯まで餌を取りに来る。行動圏が広い。有峰のキャンプ場とか有峰森林管理事務所のところは標高1,100メートルであるが、そこまで下りてくる。高山帯まで行くとなると、すごい範囲を移動していると思われる。

(委員)

生息環境管理というところで、人工林の管理と混交林の整備という取組みもされているが、クマ被害という観点で言うと、ブナとか堅果類の豊凶現象というのが広域的に同調してしまうところがある大きな原因のため、できるだけ同調性の低い樹木が多いほうがいいのではないか。ブナは同調性が非常に高く、ミズナラが次で、コナラは少し低いと聞いている。また、ブナが豊作のときは食べないが、不作や凶作になると食べるような樹木があれば凶作でもある程度の餌が確保できるという点で効果があると思うが、そんな観点から考えていることがあればお聞かせいただきたい。

(事務局)

まず混交林の整備については、ここに記載はないが、「水と緑の森づくり税」を活用させていただき、経済林に向かない人工林について、混交林を目指したみどりの森再生事業に取り組んでいる。自然再生力を生かして天然林を導入する事業であり、多様な森林を形成するという意味で効果があると考えている。また、ミズナラを中心としたカシノナガキクイムシの被害跡地、これについては、過去に実のなる木をあまり限定せずに複数種いろいろなものを植えるということで、森林部門で行っている。現在は保育だけをやっているが、そういうものを、ブナとかだけに限定せずいろいろなものを植えることによって、今言っていたような代替のものになるのではないかと期待している。